A Commentary on Domyo Ajari Syu (5)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏木, 由夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6015

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第四十七号、平成二十七（二〇一五）年三月

『道命阿闍梨集』注釈（五）

柏木由夫

【キーワード】時鳥、花山院、嵐山、法輪寺

121　法輪に人のまゐ(い)りて、日くれぬといそぐに
いつとなきをぐらの山のかげをみ(欠)てくれぬと人のいそぐめるかな

【校異】○まいりて―まてゝ（谷）、○日くれぬ―日の暮ぬ（書1）、○をくらの―おいらく（谷）、○かげを□□―かげをみて（書1・書2・谷）

【他文献】新古今集・雑中・一六四五「法輪寺に住み侍りけるに、人のまうで来て、暮れぬとて急ぎ侍りければ」初句「いつとなく」五句「いそぐなるかな」

【現代語訳】法輪寺に人が参詣に来て、日が暮れたと帰りを急ぐのでいつと時を限らず暗い小倉の山の山陰を見て、日が暮れたと人が急ぐようだよ。

【語釈】

○法輪―以下一〇の語釈再掲。法輪寺。京都市西京区嵐山虚空蔵山町。智福山。真言宗御室派。寺伝では和銅六年（七一三）元明天皇の勅願による行基創建とする。『源平盛衰記』によると天平年間（七二九～七四九）建立、天長六年（八二九）空海の弟子の道昌僧都が本尊の虚空蔵菩薩を刻んで安置し、寺名を法輪寺とした。『枕草子』「寺は」で壷坂・笠置と並んで挙げられ、『道命集』のほかに、『重之子僧集』『和泉式部集』『公任集』『赤染衛門集』『道済集』などに見える。三保サト子氏は「道命は凡そ長徳から長保にかけての頃、縁あって法輪寺に住房をもつことになったらしい」（前掲「法輪寺の道命阿闍梨」）とするが、それは晩年に及ぶものだったか。

道命阿闍梨なくなりてのち、法輪に詣でたりしに、住みし坊の桜の咲きたりしを見て

誰見よとなほ匂ふらん桜花散るを惜しみし人もなき世に

（赤染衛門集・五八一、玉葉集・雑四・二三九五）

○いつとなき―①単に事柄について時が定まらないことを表す場合と、②事柄の時が限定されず恒常的であることを表す場合とがある。ここは②。次の『道命集』歌は①、『出羽弁集』歌は②。

会ふことのいつとなきだにわびしきにむつれしほどの遠ざかるらん

（道命集・二八）

いつとなき松の緑もこの春はちしほまされる色をみせばや
（出羽弁集・二〇）

○をぐらの山のかげをみて―「みて」は底本欠、他諸本で補う。「小倉（の山）」に「を暗し」を懸ける。小倉山は、法輪寺から大井川を隔てて北西に位置する。小倉山は文字どおり、いつも小暗いとされるが、ちょうど夕日が越えて、小倉山が陰になった状態の時に詠んだか。二七七参照。

隈ごとにここらさやけき秋の月小倉の山の陰はいかにぞ
（好忠集・二三〇　毎月集　八月中）

もみぢ葉をけふは猶見むくれぬともをぐらの山の名にはさはらじ
（拾遺集・秋・一九五・能宣）

蜩の鳴きつるなへに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける
（古今集・秋上・二〇四・読み人知らず）

○いそぐ―日が暮れて、帰宅を急ぐ。

暮れぬとも何かいそがむ紅葉ばの下照る山は夜も越えなむ
（匡房集・一一五）

【評】「小倉山」が「暗い」とのイメージによって作られたが、「珍しく草庵を訪れた人が帰りを急ぐので、半ばそれを揶揄しながら引き留めた歌である。もとより、その底にはさびしい草庵に住む者の人恋しさ・人なつかしさが透けて見えている」（新古今和歌集全評釈）とされる。同時に日暮れ時の哀愁も感じさせる。一二〇との間では、「朝日」と「小暗」の対照があるが、初句（うちはへて―いつとなき）・二句（あさ日の山の―をぐらの山の）・四句（くるゝもしらず―くれぬと人の）の各句で対句的な構成になっている。

水に紅葉のいとおほうながるゝをみて

122 はるさめのあやおり（を）ひてし水のおもにけふはもみぢのにしきをぞしく

【校異】○をみて―を（谷）、○をりひて―とりひて（谷）、○けふ―ふる（谷）

【他文献】詞花集・秋・一三四「春より法輪に籠りて侍りける秋、大井川に紅葉のひまなく流れけるを見て詠める」二句「綾織りかけし」四句「秋は紅葉の」

【現代語訳】水面に紅葉が格別多く流れるのを見て

春雨が綾を織って濡らした水面に、今日は紅葉の錦を敷き詰めているよ。

【語釈】

○あやおりひてし―本文「ひ」について、翻刻された『新編国歌大観』・『道命阿闍梨集本文と総索引』と、そのテキスト版は「す」、『私家集大成CD-ROM版』は「シ」とするが、底本以下諸本に異動はない。「ひて」は、水に浸ける、ひたすの意を表す下二段活用の動詞「漬（ひ）つ」の連用形で、用例は僅少。春雨が水面に　綾を織り、その綾織物を水に濡らした、の意。

天雲のはるかなりつる桂川袖をひててもわたりぬるかな
（土佐日記・五八）

水の面に綾織り乱る春雨や山の緑をなべて染むらむ
（新撰万葉集・一、新古今集・春上・六五・伊勢）

○もみぢのにしきをぞしく―赤や黄の色鮮やかに染まった紅葉を織物の錦に例えた。

このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに
（古今集・羈旅・四二〇・菅原道真）

ももしきの昔の友を見にくればあらしの風も錦をぞしく
（宇津保物語・国ゆづり下・八九四・仲忠）

【評】もともと大井川は紅葉の名所だが、春雨が綾織物を作ったところに紅葉の錦を敷いたと、対比的な季節である春と秋ともに織物に例えて川面の美景を詠んだ。特に上句は『新撰万葉集』歌に基づく。

水の綾に紅葉の錦重ねつつ川瀬に波の立たぬ日ぞなき
（拾遺集・秋・一九七・健守法師）

法輪よりかへる人に

123 くる人のしばしとまらばおほゐ河ゐせきもいかにうれしからまし

【校異】 なし。
【他文献】 なし。
【現代語訳】 法輪寺から帰宅する人に
やってくる人がしばらく留まるならば、大井川の流れを堰き止める堰（ゐせき）もどれほど喜ぶことだろうか。
【語釈】
○くる人―道命に親しんで訪れる知人。
来る人をとどむる堰はなけれども人目もる身ぞわびしかりける
（能宣集・六二一）
○しばしとまらば―道命は知人の訪れを喜び、しばらく留まっていてほしいと思っている。「とまる」は「ゐせき」の縁語。
年ごとの花にわが身をなしてしか君が心やしばしとまると
（平中物語・第八段・三六八）
○ゐせき―川などに設けて、水を他に引くため流れを堰き止める柵。ここでは、擬人法を用いて道命の気持ちを代弁している。
落ち積もる紅葉を見れば大井川ゐ堰に秋もとまるなりけり
（後拾遺集・冬・三七七・公任）
ゆく春のゐせきにとまる物ならばまづおりたちてわれぞ堰かまし
（源賢法眼集・一一二）
○うれしからまし―嬉しいだろうに。堰の思いに道命の思いをこめた。二句の仮定表現と結びついて実際は実現しないことを示唆する。
めのみまかりての年のしはすのつごもりの日、ふることいひ侍りけるに
なき人のともにし返る年ならば暮れゆく今日はうれしからまし
（後撰集・哀傷・一四二四・兼輔朝臣）
【評】 詞書がなければ、単に大井川を訪れた人が留まらないことを惜しんだ歌になるが、詞書によって、法輪寺の道命の許を訪れた人が帰ることを惜しんで、留めたい思いを大井川の井堰に託し擬人化して、堰も留めたら嬉しいはずとした。一二一と同趣だが、一二三の方が人を留めたい思いが直接に表されている。

故内侍のかみうせ給ての年、桜のいみじうさきちりなどするを、右大臣殿み給て、たいの御かたにきこえ給ふ

124 きみもなきやどにに（こ）ほへるさくらゆゑ（こ）花のすがたをおもひいづらん

【校異】 ○右大臣殿―左大臣殿（谷）、○きみも―きみ（谷）
【他文献】 なし。
【現代語訳】 故尚侍が亡くなられた年に、桜が豪華に咲いたり散ったりなどするのを、右大臣が御覧になって、対の御方に申し上げなさる
主もいない宿に咲き誇る桜なので、あの方の花のように美しかった姿を思い出していらっしゃるのでしょう。
【語釈】
○故内侍のかみうせ給ての年―「故内侍のかみ」は三条院尚侍だった兼家女綏子。道綱の義姉妹。母が「対の御方」。道命にとっては叔母。綏子が尚侍に任じたのは永延元年（九八七）、麗景殿を局とした。後に源頼定と密通した。寛弘元年（一〇〇四）二月七日没。没時は桜が咲く時期。綏子と「対の御方」については、次の『栄華物語』「様々のよろこび」に記されている。

東宮（三条院）は今年十一にならせ給にければ、この十月に御元服の事あるべきに、大殿（兼家）の御女（綏子）、対の御方といふ人の腹におはするをぞ、内侍のかみになし奉り給ひて、……対の御方、いと色めかしう、世のたはれ人に言ひ思はれ給へるに…

○右大臣殿―一二四の作者。綏子が薨じた寛弘元年の右大臣は藤原顕光（②）、しかし、顕光と道綱は不仲であること（『古事談』）、兼家五男の道長が同年二月一三日に対の御方を弔問している（『御堂関白記』）ことなどから、谷山氏蔵本本文の「左大臣」に従って、藤原道長とする（③）の両説があるが、後者に従う。

○たいの御かた―「対の御方」。綏子母である藤原国章女で、①によれば、『蜻蛉日記』に登場する兼家妾の一人「近江」（①坂口玄章「蜻蛉日記人物考」国語と国文学　昭和七・六、②田中新一「道命阿闍梨の伝記的考察」国語国文学報　昭和六〇・三、③三保サト子「法輪寺の道命阿闍梨」島根女子短期大学紀要　昭和六三・三　参照）。

○きみもなきやどににほへるさくら―「きみ」について、②兼家と③綏子の両説あるが、③に従う。住んでいた人の親しんでいた、その家の桜が、その人の死後に美しく咲くことで、人の死を際立たせる。

人もなき宿に匂へる藤の花風にのみこそ乱るべらなれ
（貫之集・七一）

○花のすがた―花のように美しく晴れやかだった綏子の姿。

あるところに花見にいきたりけるに、さるべき殿上人若やかなる上達部など、今も競ひて花の下にゐたるをみて

木のもとに星をつらねて見ゆるかな花のすがたの雲の上人
（肥後集・四一）

【評】　二二一に重出、四句「はるのすがたを」。宿に咲く花から亡き人を偲ぶことは哀傷歌の方法として一般的。類似例を示す。

あるじみまかりにける人の家の梅の花を見て詠める

色も香も昔の濃さに匂へども植ゑけむ人の影ぞ恋しき
（古今集・哀傷・八五一・貫之）

むすめにまかりおくれて又の年の春、桜の花盛りに、家の花を見て、いささかに思ひを述ぶといふ題を詠み侍りける

桜花のどけかりけり亡き人を恋ふる涙ぞまづは落ちける
（拾遺集・哀傷・一二七四・実頼）

主なき家の桜を見て詠み侍りける

植ゑ置きし人の形見と見ぬだにも宿の桜を誰か惜しまぬ
（千載集・哀傷・五四七・範永）

とあるかへし

125　なき人のかたみとおもふ花にさへちりおくれぬる身をいかにせん

【校異】　なし。

【他文献】　なし。

【現代語訳】　とある返事

死に遅れた上、亡くなった人の形見と思う花が散ることにまでも遅れてしまった我が身をどうしたらよいのでしょう。

【語釈】

○なき人のかたみとおもふ花―②は「『なき人』とは兼家であり、その兼家に先立たれ、今またその『形見』の遺子綏子に死なれた近江の悲しみを体して詠み出した」とするが、③は一二四の「君」とともに「なき人」も綏子とし、「生前、娘が愛していた桜に娘の面影を偲び、その形見として日夜ながめてきたのに、その花も散り急ぐ頃となり我身一つが取り残されていく、その悲しみと焦躁をうたったもの」とされた。両者の相違は「花」が綏子を表すとする（②）か、綏子の形見とする（③）かに拠る。ここで兼家を引き合いに出す必然性は無いので③の理解が妥当であるとしたい。

伊勢の御息所うみたてまつりたりける御子の亡くなりにける

が描きおきたりける絵を、藤壺（安子）より麗景殿（醍醐皇子代明女荘子女王（綏子とも））の女御の方につかはしたりければ、この絵返すとて

亡き人の形見と思ふにあやしきはゑみても袖の濡るるなりけり

（拾遺集・雑下・五四二・麗景殿宮の君）

○ちりおくれぬる―「ちりおくる」は、道命の和歌以前に見られない語。花の散ることが遅くなった意のほかに、「おくれ」は、人に死なれ、この世に残された場合にも用いる（『道命集』一〇八・一一五・一四八参照）。ここでは、③に述べる如く、母親が娘の死に遅れたのみならず、娘の形見の花が散ることにも取り残された、の意。

一木づつ花は咲かなん山桜散り遅るるを日数見るべく

（教長集・一三九）

人の世の思ひに叶ふものならば我身は君におくれましやは

（後撰集・哀傷・一三九八・定方）

＊醍醐天皇崩御後の思い

親しかりける人のみまかりけるに詠める

おくれじと思へど死なぬ我身かな一人や知らぬ道を行くらん

（千載集・哀傷・五五三・道命）

○いかにせん―娘とその形見の花をも失った母親の無力感が表され、悲しみの深さを印象づける。

【評】 二二二に重出。詞書「とありける、御かへししてとありしに」二句「かたみとおもひし」四句「たちおくれたる」。二二二の詞書によれば、亡き綏子の母の気持ちを道命が代作した。綏子は道命の叔母に当たり、一一五で直接的な哀傷の思いも詠んでいる。③にも詳しいが、代作することに不自然さはない。母対の御方自身の歌も残されている。

かくて麗景殿の尚侍（綏子）は東宮（三条院）へ参り給ふこと有難くて、式部卿の宮（為平）の源中将（頼定）忍びて通ひ給ふといふ事聞えて、宮（東宮）もかき絶え給へりし程に（尚侍）なくならせ給ひにしかば、宮さすがにあはれに聞しめしけり。桜の面白きを眺め給ひて、対の御方、

同じごと匂ふぞつらき桜花今年の春は色変れかし

などぞのたまひける。

（栄花物語・鳥辺野）

一二五の作者を道命とすることについて、②では「道綱の子道命が、道綱母の最も憎んだ近江の為に代作をしたというのである。道綱母が在世中だったら目を向いたに違いない。（中略）道綱母の側からみれば、夫兼家の愛を奪い取って自分を苦しめた女とその娘への肩入れということになる」とし、「父の妹に当たる綏子の死に際し、道命が服喪することは当然あってしかるべきだが、この代作行為は異とするに足るといわねばならぬ」とされた。一方、③では②に対し、「道命も服喪したであろうし、綏子の法要にも奉仕していたであろう。祖母（道綱母）と対の御方との確執は既に昔の話であり、道命の生き方から推して、彼にそうしたこだわりは無かったものと思われる」とされた。

大井河に、うかひなどするをみて、かへりて、をかしがる人に

126 かゞりびをともす河べもかはらねばなほ（を）そのくれのこゝちこそすれ

【校異】 ○みて―みち（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 大井川で鵜飼いなどをするのを見て、帰宅して楽しんだという人に

篝火を灯す川辺も変わらないが、やはりあなたと過ごした楽しい夕暮れの気持ちがしますよ。

【語釈】

○大井河に、うかひなどする―和歌での大井川は、紅葉・筏とともに

鵜飼が詠まれた。

大井川うかべる船の篝火に小倉の山も名のみなりけり
（後撰集・雑三・一二三一・業平）

大井川いくせ鵜船の過ぎぬらんほのかになりぬ篝火の影
（金葉集・夏・一五一・雅定）

梅津河ともす鵜船の篝火にそこのみくづもかくれざりけり
（恵慶集・七六八）

○かはらねど―「ど」は、底本で「は」にミセケチで「と」を傍書修正することに因る。逆接とするのは、上句の外見と下句の内心の齟齬を示すことを意図すると解する。

○そのくれ―「をかしがる人」とともに鵜飼いを見た夕暮れ。「暮れ」は、筏の「榑」（皮が付いたままの材木、丸太）の意で大井川の縁語。

一条院を岩陰に収め奉りて侍りけるを、ものへまかりけるに、かしこを過ぐとて、御陵に参りて拝み奉りけるに、悲しき心しければ、帰りて人にいひつかはしける

岩陰の霧を煙に紛へつつその夕ぐれの心地せしかな
（続詞花集・哀傷・四〇一・式部大輔資業）

待つほどの過ぎ（杉）のみ行けば大井川頼むる暮れ（榑）をいかがとぞ思ふ
（後拾遺集・雑二・九〇四・馬内侍）

○なほそのくれのこゝちこそすれ―「なほ……心地こそすれ」は、気持ちを強調する定型表現。

わが恋はたなばたつめにかしつれど猶ただならぬ心ちこそすれ
（公任集・三一一）

【評】 詞書が示す状況が不明瞭。道命とともに大井川の鵜飼いを楽しんだ人が、帰ってから楽しかったと伝えてきたのに応じた作と状況を捉えた。一首は、鵜飼の篝火は変わらず趣あるが、あなたのいた夕暮れの楽しさが忘れられない、と相手の気持ちに同感する意を伝えた。

ほとゝぎすをきゝはじむる

127 きゝそむるかひこそなけれ郭公またれぬよはは（ゝ）あらじとおもへば

【校異】 ○ほとゝきすを―ほとゝきす（谷）

【他文献】 続千載集・夏・二三八　作者「安法法師」

【現代語訳】 時鳥の声を聞き始める

聞き始める甲斐がまったくないよ。時鳥は待たれない夜半はないだろうと思うので。

【語釈】

○きゝそむる―時鳥は夏に鳴き声を聞かせる鳥で、人々が待ちわびてその初声を聞く。

時鳥はつかなる音を聞き初めてあらぬもそれとおぼめかれつつ
（後撰集・夏・一八九・伊勢）

初声を聞き初めしより時鳥ならしの岡にいくよ来ぬらん
（範永集・一七二）

○かひこそなけれ―聞くことのできた時鳥の声に魅力がなくて待った甲斐がないのではなく、むしろ一層聞きたい気持ちが増して、聞こうとすることを終えられない点で、聞けた一声に効果がないことを言う。

夏来れど甲斐こそなけれ時鳥いや遠にこそ遠くなるなれ
（道命集・二七六）

山寺にこもりて侍りけるに、郭公のなき侍らざりければよめる

山里の甲斐こそなけれ時鳥都の人もかくや待つらん
（詞花集・夏・五八・道命、道命集になし）

山近き甲斐こそなけれ時鳥都なりともかくぞ待たまし
（経衡集・一〇）

○またれぬよははあらじとおもへば―和歌では、夏の夜は、寝ないで時鳥の声を待つとする。一声を聞けたが、なお夜更け（よは）まで

毎夜待ち続ける意を表す。

待たぬ夜も待つ夜も聞きつほととぎす花橘の匂ふあたりは

（後拾遺集・夏・二〇二・大弐三位、下野集・一六九）

「花橘の匂ふあたりは」など言ひ慣れたるやうに見ゆるを、「待たぬ夜」もあるは、いかなる折すさまじうて、待たではあるにかあらん。ただ「待たでも聞く」とあらば、さてもありなん。「待つ夜も」と比べたれば、さは聞かまほしうもあらぬにこそとおぼゆるなり。

（難後拾遺）

寝ぬ夜こそ数つもりぬれ時鳥きくほどもなき一声により

（後拾遺集・夏・一九一・小弁）

時鳥待つほどとこそ思ひつれ聞きての後も寝られざりけり

（同・同・一九八・道命）

【評】　時鳥の一声を期待して夜ごとに待ち、ようやく一声聞けたが、予測に反し、なおその声を聞きたい気持ちはつのって、その後も時鳥の声を待ち続けることになるため、結局最初の一声は、それで終了にならない点で効果がないとされる。時鳥を詠む本意に従った歌。

128　め、うせたりける人をしらで、いみなどはてゝ
　　世中をわかれにし人ありけむと山ほとゝぎすなくにこそしれ

【校異】　○うせたりける―うせたる（谷）、○はてゝ―はつと（書2）、○しれ―しれ（書2）きけ（谷）

【他文献】　なし。

【現代語訳】　妻が亡くなった人のことを知らないで、喪などが終えてこの世を別れた人があったということを、山時鳥が鳴くことで、やっと知りましたよ。

【語釈】

○め、うせたりける人をしらで、いみなどはてゝ―「知り合いの妻がなくなったことを知らず、その喪が明けた後に知って贈った歌」の意。喪明けの和歌は、多く詠まれているが、一二八のような状況は希か。六一参照。

人のいみはててもとの家にかへりける日

ふるさとに君はいづらと待ちとはばいづれの空の霞といはまし

（後撰集・哀傷・一四一五）

○世の中をわかれにし人―この世を去った人。死者。八代集では、他に、「亡き人」「消えにし人」「昔の人」と表現する。

右大将通房みまかりて後、古く住みはべりける帳の内に蜘蛛のいかきけるをみてよみ侍ける

別れにし人は来べくもあらなくにいかに振る舞ふささがにぞこは

（後拾遺集・哀傷・五七六・土御門右大臣女）

○山ほとゝぎすなくにこそしれ―時鳥は冥土から来る鳥ともされた。そのため死者のことを生きている者に語り知らせるとされた。四三参照。

産み奉りたりける皇子の亡くなりての又の年、郭公を聞きて死出の山越えて来つらむ時鳥恋しき人の上語らなむ

（拾遺集・哀傷・一三〇七・伊勢）

ほととぎすをききて

別れにし人はいかなる時鳥死出の山路の物語せよ

（赤染衛門集・二八九）

【評】　喪中が過ぎて知った友人の妻の死への驚きと、弔問が遅れた知人への詫びの意もあるか。妻に死なれた友人に送った歌の例を挙げる。

中納言兼輔めなくなりて侍りける年のしはすに、貫之まかりて、物いひ侍りけるついでに

恋ふるまに年のくれなばなき人の別やいとどとほくなりなん

（拾遺集・哀傷・一三〇九・貫之）

ほとゝぎすのこゑをきゝて

129　くもゐにぞなきゆくなれど郭公きくそらもなしよはの一声

【校異】　○きくそらもなし―聞空もなき（書[2]）

【他文献】　なし。

【現代語訳】　時鳥の声を聞いて

まさに空高くに鳴いて飛んで行くようだが、時鳥は、なお聞く空もなく、あてもない夜更けの一声だよ。

【語釈】

○くもゐ―雲のある所。空。鳥としては、雁・鶴について言うことが多い。時鳥は雲居を飛びながら夜更けに一声鳴くことが詠まれる。五一参照。

一声のおぼつかなきに時鳥雲井にさへも鳴き渡るかな

（兼澄集・六八）

夜を重ね待兼山の時鳥雲井のよそに一声ぞ聞く

（周防内侍集・一二）

○そらもなし―この「空」は「形式名詞として用い、ある環境に置かれた場合の心境を表す。（中略）目標。「なし」を伴って用い、この先行動すべき目当てがわからない意を表す」（角川古語大辞典）とある。「日本国語大辞典」で「そらがない」は、「落ち着いた気分がしない。気が気でない。また、気が起こらない。気乗りしない」とある。ここでは空高くから聞こえた一声を頼りに、なお時鳥の声を求めようとしても得られない（A）、あるいは得ようとしない（B）ことと見られる。「空」は「雲井」の縁語。用例では、何かを進んで行おうとしないBが多い。

波の上に見えし小島の島隠れ行く空もなし君に別れて

（拾遺集・別・三五二・かなおか）

さしかへりゆく空もなし高瀬舟あしまのきしにこころとまりて

（経信集・二七七）

人のうせたまへる所にて、月などある夜花をみてよめる

さくら花ちりにし枝のこひしきにみるそらもなし夜半の月かげ

（道命集・一七四）

雲間郭公

なかなかにきく空もなしほととぎす雲路をかけるよはのしのびね

（為忠家初度百首・為忠・一七九）

一方、少数だがAと思われるものもある。

夏かりの玉江の芦をふみしだきむれゐる鳥のたつそらぞなき

（後拾遺集・夏・二一九・源重之）

この重之詠は『後拾遺和歌集』の注釈で「空に飛び立ちかねているよ」（和泉古典叢書）、あるいは、「飛び立つ空がないことだ」（新古典大系）と解釈される。当該一二九に最も近似するのは、

常よりもきくそらぞなきかきつらねおのが常世へ帰るかりがね

（天喜四年閏三月六条斎院歌合・中務・二一）

で、ともにAに属すと見る。

○よはの一声―歌語「夜半（よは）」は三代集では合わせて三例だが、「後拾遺集」で十六例と急増する語。私家集では「後撰集」時代から多く見られる。道命集では好忠集・和泉式部集・相模集と同じく七例あって多く見える。「夜半の一声」は清正集が初出（『歌語「よは（夜半）について」――後拾遺集を中心にして――』柏木由夫和歌文学研究　第五十一号　昭和六十年十月、『平安時代後期和歌論』所収）。一五三参照。

五月闇くらまの山の時鳥おぼつかなしや夜半の一声

（清正集・二三）

【評】　用例に挙げた為忠詠について、『為忠家初度百首全釈』の「補説」で、家永香織氏は、

郭公の鳴き声に対する願望を和歌に詠む場合、素直に声が聞きたいと詠む、悲しみや物思いが募るので声を聞きたくないと詠む、一声を聞いただけではかえってつらいので聞きたくないと詠むと

いう、だいたい三つの類型がある。当該歌は言うまでもなく第三の類型に属する。郭公の声を賞美する思いが強いゆえに、空高いところで鳴くひそやかな忍び音だけでは、どうにも物足りなく、もどかしい。ならば、いっそのこと、聞かずにいようというのである。

右の類型で、第三は、桜などではあることが確かだが、時鳥でもあって一つの類型として認められるかは定かではなく、為忠詠は「なかなかに」があるので「なまじっか聞こうという気にもなれない」と訳される。しかし、そうしたきっかけもない一二九も「聞きたくない」との解が正しいかは疑問が残る。むしろ、時鳥が夜更けになく一声を聞きたいという本意に従いつつ、それを果たせないと詠んでいると見るべきと考える。「くもゐにぞなきゆく」「きくそらもなし」の表現で、類義語の「くもゐ」と「そら」に応じて、「なきゆく」と「きくそらもなし」との対立をさせるところに言葉遊び的な表現の工夫がある。

130　とほくなくこゑのするを
　　ほとゝぎすなつきてなくといふなれどくもゐにのみもきゝわたるかな

【校異】なし。
【他文献】なし。
【現代語訳】時鳥が遠く鳴く声がするのを
時鳥は、夏が来て馴染んで鳴くというが、空高くにばかり聞き続けることよ。
【語釈】
○なつきてなく―「夏来て」に「懐きて」を懸ける。地上の人間に「懐きて」とあることと、空高い「雲井」の位置の対立することが一首の趣向。次の「後撰集」歌に拠るか。

なつきぬと人しもつげぬわが宿に山時鳥はやくなくなり
（延喜一三年（九一三）亭子院歌合・四四）
なつきぬといぶきの山の時鳥そそやなくなりあさなあさなに
（千穎集・一九）
時鳥なつき初めてし甲斐もなく声をよそにも聞き渡るかな
（後撰集・恋五・九一二・読み人知らず）
ほととぎす夏きぬなりといふなれどけぢかき声をまだきかぬかな
（道命集・二五一）
夏くれどかひこそなけれほととぎすいや遠にこそ遠くなるなれ
（同・二七八）

○くもゐにのみ―高い空ばかり。人から遠く離れた位置。
人を思ふ心は雁にあらねども雲井にのみもなき渡るかな
（古今集・恋二・五八五・深養父）
今日とだに契らぬ仲は会ふことを雲井にのみも聞き渡るかな
（玉葉集・恋四・一六三三・道長）

【評】時鳥の声を間近で聞きたいとの思い。知識と予想に対しての実際がちぐはぐな様子を描く。二五一も、表現に若干の違いがあるが内容はほぼ同じ。二七八も同様か。同一歌の重出というより類似歌とすべきか。

131　かたらふ人の、たえてとしごろありて、たれをかいまはかたらふなどいひおこせたれば
　　とふ人もいまはなしわがみわの山すぎにしかたをあはれとぞ思ふ

【校異】○かたらふ人―かたらひと（谷）
【他文献】なし。
【現代語訳】親しく交わる人が、疎遠になって何年か経って、誰に今は親しんでいるのかなどと言ってよこしたので

訪ねる人も今はありません。我が身は、人の訪れを待つ三輪の山の杉にちなんで、過ぎた昔をしみじみ懐かしいとばかり思います。

【語釈】

○かたらふ人―「「語らふ」は、自分の思う内容を相手に伝える意味の語…互いに言葉を交わすことで親しい関係をつくり上げる、そこからこの語には、親しく交際する、契りを交わすなどの意味が生じる（『王朝語辞典』秋山虔編、東京大学出版会　二〇〇〇年三月刊「語らふ」山口明穂執筆）。勅撰集の詞書の表現としては、通常恋人の場合が多い。ここも恋人なのか。↓二七五。次の例はどうだろうか。

かたらはむと言ひて道命法師の許にまうで来たる人の詠み侍りける

絶えやせん命ぞ知らぬ水無瀬川よし流れても試みよ君

（後拾遺集・雑四・一〇九二）

これについて、『和泉古典叢書5　後拾遺和歌集』では、「老齢の男性の詠であろう。（中略）友情を水無瀬川に寄せて契る」とするが、『新古典大系　後拾遺和歌集』では、「友情を誓う歌か。ただし、恋愛関係のように読める扱い方をしているか」とし、同歌が『定頼集』にもあることから、道命の相手を年少で親しい定頼かとする。同性での恋歌の可能性もある。

かたらひけるわらは、おもはずうとくなりにけるのち、なくなりにけるを、人のとぶらひて侍りければよめる

悲しさをこれよりげにやおもはましかねてならはぬ別なりせば

（千載集・哀傷・五八〇・静厳法師）

○とふ人もいまはなし―人里離れて訪問者がいない状況をいう。訪問者への関心が、「とぶらひきませ」とある次項「みわの山」で掲出した古今集歌を導き寄せる。

山にきよき事せさすとておはしけるに、つれづれなりければ

今はとていりなむ時ぞおもほゆる山ぢをふかみとふ人もなし

（公任集・四七九）

○みわの山―大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市の東北部。大物主神を祭神とする大神神社（三輪明神）がある。多くの和歌に詠まれる神杉があるほか、三輪山説話が伝わる。

我が庵は三輪の山本恋しくはとぶらひきませ杉立てる門

（古今集・雑下・九八二・読み人知らず）

を基とし、「わがみ（我身）」の「み」から懸詞で「みわ…」と導かれ、三輪に縁が深い「杉」と同音の「過ぎ」を導く。「過ぎにし方」は、年来仲の絶えていた「かたらふ人」。三輪の「み」の懸詞は通常「見」を掛け、「身」の懸詞は類例がない。

会ふことを今は限りとみわのやま杉の過ぎにし方ぞ恋しき

（後拾遺集・恋三・七三八・皇太后宮陸奥）

いま人の心をみわの山にてぞ過ぎ（杉）にし方は思ひ知らるる

（金葉集・恋下・四五七・前斎宮甲斐）

○あはれとぞ思ふ―定型的表現。　↓一九二。

黒髪の白くなりゆく身にしあればまづ初雪を哀とぞ思ふ

（古今六帖・七〇八）

【評】　かつて親しく交わった人からの久しぶりの問いかけに応じて、道命も今の寂しさと昔の親密さを思ってこみ上げる思いを伝える。詞書で「たれをかいまはかたらふ」とある関心の持ちようからは、二人は元恋人という関係が最も自然だろうか。

七月十よ日、かぜのふくに

132　ふきそめてまだほどもへぬ秋風の身にしむばかりあはれなるかな

【校異】　○十よ日―十四日（谷）

【他文献】　なし。

【現代語訳】　七月十日過ぎに、風が吹くので

吹き始めて、まだ時も経っていない秋風が、身にしみ通るほどにしみじみと感じられるよ。

【語釈】

○ふきそめて―七月の始めが秋風の吹く始まり。

秋風のうち吹き初むる夕暮は空に心ぞわびしかりける
（後撰集・秋上・二二一・読み人知らず）

吹き初めし日より身にしむ秋風も荻の葉ならぬ人は知らじな
（定頼集・一一八　他人歌）

○まだほどもへぬ―まだ過ぎた日がわずかであること。

夏すぎてまだほどもなき風のおとを秋のしるしとけふはきくかな
（六条斎院歌合・三・遠江）

○みにしむばかりあはれ―主に秋風について「身にしむ」と詠まれることは伝統的。

吹く風は色も見えねど冬来れば一人寝る夜の身にぞしみける
（後撰集・冬・四四九・読み人知らず）

吹きくれば身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな
（古今六帖第一・あきの風・四二三）

秋風は身にしむばかり吹きにけりいまやうつらん妹がさごろも
（輔尹集・三二一）

秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらん
（詞花集・秋・一〇九・和泉式部、興風集・五四、和泉式部集・一三二、同・八六〇）

身にしみてあはれなるかないかなりし秋吹く風をよそに聞きけん
（和泉式部集・一七六）

【評】　秋の訪れを風で知ることは、

秋立つ日よめる

秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
（古今集・秋上・一六九・藤原敏行）

を代表として数多く詠まれている。一三二は、特に『詞花集』他にある和泉式部歌との重なりが大きい点に注意される。

ひろさはといふ所にまかりたり、人〳〵ありて、いけみづのきよくもあるかなといひて、歌よみしに、かはらけとりて

133　いけ水のなからましかばやまざとにひとりや人のすむべかりける

【校異】　○人〳〵―人に（谷）、○すむへかりける―すみへかりける（谷）

【他文献】　なし。

【現代語訳】　広沢という所に出掛けた。人々がいて、広沢の池の水が清らかだなと言って、歌を詠んだが、酒杯を取って清らかな池の水がなかったならば、この山里に誰でも一人で人が住んで心澄ますことができるだろうか。いやないだろう。

【語釈】

○ひろさは―広沢池。「京都市右京区嵯峨広沢町。音戸山の南麓、大覚寺・大沢池の東にある。（中略）平安時代には広大な池のほとりに月見堂・釣殿・大覚寺の観月所であった潜竜亭などがあり、特に西岸近くの観音島には遍照寺から橋が架けられるなどして観月の勝地として、千代の古道を通って大宮人が盛んにこの池を訪れた。「和歌初学抄」「八雲御抄」「和歌色葉」にあげられ、詠歌も多い」（日本歴史地名大系）とある。遍照寺は永祚元年（九八九）寛朝の建立と伝えられ、池の開削も寛朝によるとされる。広沢は月の名所で、多くはその澄んだ月光を詠む。一三三は例外。

広沢の月を見て詠める

住む人もなき山里の秋の夜は月の光も寂しかりけり
（後拾遺集・秋上・二五八・範永）

……広沢の池に月の映りたるを

水の面に宿れる月の影見れば波さへ寄ると思ふなるべし
（公任集・四〇六）

八月十七日の夜、いみじく月明かかりしかば、（中略）広沢こそ面白からめ、そち行かんと言ひて行くほどに、（中略）かの寺に行き着きたるに、所の様げにいといみじ。西なる僧房の人も住まず荒れたるに、月を見出したるに、思ひ残す事なし。（中略）

水草引く人しなければ水の面に宿れる月も澄みぞ煩ふ

（中略）

年経れど秋もとまらぬ水の面に幾夜か月の澄み渡るらん

（中略）西に傾きたる月の、水の面を照らしたる、はるばるとして目の及ぶべきにもあらず、（中略）池の上の月といふ詩を誦して過しほどは、思ふこと少し忘れたりき。
（明王院旧蔵本定頼集・二九～三二）

他の私家集では「朝光集・一二三」「為仲集・一三」「重之集・三二」「元真集・二八」などに見える。又、『本朝無題詩』には遍照寺を詠んだ藤原明衡・藤原実範・中原廣俊の漢詩等が見える（『摂関期和歌史の研究』川村晃生　三弥井書店刊　平成三年四月）。

○いけ水―「澄む」を縁語とし、例は多い。月を映すと歌う例も『後拾遺集』に目立つ。

（池のほとりに、つるたてり）

あしたづの影のみうかぶ池水は千代にすむべきしるしとぞみる
（順集・一九四）

今年だに鏡と見ゆる池水の千代へて澄まむ影ぞゆかしき
（後拾遺集・賀・四五六・範永）

池上月

月影の傾くままに池水を西へ流ると思ひけるかな
（後拾遺集・雑一・八三六・良暹法師）

月のいと面白くはべりける夜、（中略）住み荒らしたる家のつまに出で居て、前なる池に月の映りてはべりけるを眺めてなんはべりける（後略）

池水は天の川にや通ふらん空なる月の底に見ゆるは
（同・同・八三九・懐円法師）

山の端のかからましかば池水に入れども月は隠れざりけり
（同・同・八四二・頼宗）

○やまざと―ここは広沢のこと。前掲『後拾遺集』の範永歌参照。

○ひとりや人のすむべかりける―山里に住む人の孤独が、澄んだ池水によって慰められることで住むことができるはずだとする。「住む」に池の縁語「澄む」を掛ける。

よそながら寝ぬ夜の友と知らせばやひとりや人の衣打つらん
（続後撰集・秋下・三九一・弁内侍）

もろともに眺めし人も我もなき宿には月やひとり住むらん
（後拾遺集・雑一・八五五・長家）

【評】三〇四に重出。「歌詠みしに、山里にて、かはらけ取りて」。広沢の池辺で月を詠むことの流行が『後拾遺集』に見られる。それは『定頼集』の詞書や範永の作品に見るように、寂しげな情景を賞美するもので、月の美しさを直接詠んでいない一三三でも、池水の清らかさは、月明かりに照らされた結果だから、同様の風趣を詠んでいると言えよう。

人のもとにやる

134　秋風のうちふくごとにをぎ(お)のはのうごきあゆだにきみぞこひしき

【校異】○うちふく―うちふ□（谷）、○あゆたに―あえたに（書1）あゆきに（谷）

【他文献】なし。

【現代語訳】人の所に送る

あなたが私に飽きたと思わせる秋風がさっと吹くたびに、荻の葉が揺れて落ち散ることにまでも、あなたが恋しくてならない。

【語釈】

○秋風のうちふく―表現としては類型的。「秋風」に「飽き」を懸け、つれない相手を比喩する。

秋風のうち吹き初むる夕暮れは空に心ぞ侘しかりける
（後撰集・秋上・二二一・読み人知らず）

秋風のうち吹くからに山も野もなべて錦に織りかへすかな
（後撰集・秋下・三八八・読み人知らず）

秋風のうち吹くごとに高砂の尾上の鹿の鳴かぬ日ぞなき
（拾遺集・秋・一九一・読み人知らず）

○をぎのは―風に吹かれた荻の葉擦れの音が、秋到来の気配を知らせるとされる。一三四は荻の葉音に人恋しさを誘われている。

荻の葉のそよぐ音こそ秋風の人にしらるる始なりけれ
（拾遺集・秋・一三九・貫之）

秋風の吹くにつけてもとはぬかな荻の葉ならば音はしてまし
（後撰集・恋四・八四六・中務）

荻の葉に吹く秋風をわすれつつこひしき人のくるかとぞみる
（重之集・二六八）

○うごきあゆだに―「うごく」は「神」「岩」などについて「うごかぬ」と用いる例が多い。ここは秋風に荻の葉が動くとするが、例外的用法。「あゆたに」は書陵部本の一本では「あえたに」とあり、重出する三〇三では両本とも「あゆまに」とある。いずれの本文でも類例がない。「落ゆ（あゆ）」で「こぼれおちる。したたりおちる。（中略）出ァュ（名義抄）」（角川古語大辞典）との意か。「あゆる実」（万葉集・巻一八・四一一一）や「汗あゆる」（枕草子）があり、「五月を近み　あえぬがに　花咲きにけり（五月が近いのでこぼれるばかり花が咲いた）」（万葉集・巻八・一五〇七）が用法上で最も近いか。つまり、「（荻の葉が）動いて落ちるのさえ」との意か。一応このように考えるが、しかし、「あゆ」は下二段活用の動詞で、副助詞「だに」は体言または体言に準ずる語に続くとされる（日本国語大辞典）ので、正しくは「あゆるだに」であるべきでもある。『道命阿闍梨集本文と総索引』の総索引では「うごきあゆ」に「動揺」を当てる。しかし、「揺」は「あゆく」で別語（一一六参照）。あるいは本文が「うごきあゆくに」の誤写の可能性もある。

草の葉も動かぬ夏の照る日にも思ふ中には風ぞ吹きける
（重之集・二五四）

吹きとだに吹き立ちぬれば秋風に人の心も動きぬるかな
（和泉式部集・一二二）

○きみぞこひしき―勅撰集にはなく、私家集では二例がある。

秋の夜の月かも君は雲隠れしばしも見ねば君ぞ恋しき
（人麿集・一五六）

来てみれば奈古の浦まで寄る貝の拾ひもあへず君ぞ恋しき
（伊勢集・三七九）

【評】三〇三に重出。四句が正確に解釈できず、なお考察が必要。秋風の冷ややかさが寂しさやもの悲しさを誘い、荻を揺らし葉を落とすことに人恋しさがつのることを詠み人に送った。

かへし

135　秋風はふきすぎてのみゆくおとををぎのしたばはうらみこそすれ
（書2）

【校異】○ふきすきてのみ―ふきて　み（ノカ本マ）（谷）、○ゆくをと―行こと

【他文献】なし。

【現代語訳】返事

私に飽きたという秋風は、吹いて過ぎてだけゆく音であることを、荻の下葉が裏を見せるように、私は恨むばかりです。

【語釈】
○秋風はふきすぎてのみゆく―「秋風」に「飽き」を懸け、道命を比喩して、道命がつれないとする。
荻の葉に吹き過ぎて行く秋風のまた誰が里を驚かすらん
（後拾遺集・秋上・三二〇・読み人知らず）
荻の葉を吹き過ぎて行く風の音に心乱るる秋の夕暮れ
（山家集・二九九）
○おと―荻の葉を吹く風の音に、道命からの贈歌一三四の訪れを譬える。
○をぎのしたば―「荻の上葉」の方は例が多いが、「荻の下葉」は次の二例のみ。ここでは次に掲げる惟成の恋歌に似た用法で、道命に飽きられた作者を比喩する。
さりともと思ひし人は音もせで荻の上葉に風ぞ吹きける
（後拾遺集・秋上・三二一・三条小右近）
朝ぼらけ荻の上葉の露見ればやや膚寒し秋の初風
（新古今集・秋上・三一一・好忠）
蜩
秋風の荻の下葉を吹き乱る空に満ちつる蜩の声　（元真集・六五）
女のもとにつかはしける
うら若み荻の下葉に置く露をさもほのめかす風のなきかな
（続詞花集・恋上・四七八・惟成、惟成集・四　初句「ともわかみ」）
○うらみこそすれ―恨みは、「裏見」の意で「葉」と縁語。
秋風の吹き裏返す葛の葉の恨みてもなほうらめしきかな
（古今集・恋五・八一三・貞文）
【評】　三〇六に重出。「秋風」と「飽き」、「荻の下葉」に「裏見」と「恨み」の縁語と掛詞の連鎖で一三四への切り返しとした。飽きた相手への恨みを秋風で裏返る葉に寄せる趣向としては、貞文の『古今集』歌に拠り、作者への恋心が覚めたまま音信のみを寄越す道命への恨みを詠んだ。

136　たちかへり
ふきかへす風なかりせばをぎのはのうらみつとだにいはずぞあらまし
【校異】　谷山本に拠り補う。他本欠。
【他文献】　なし。
【現代語訳】　すぐに返事して吹き戻す風がなかったら荻の葉の裏を見ることもないように、私からの言いかけがなかったならば、あなたは恨んだとさえ言わないだろうに。
【語釈】
○ふきかへす風―ここでは、一三四で道命が相手に手紙で言い掛けたことを例えた。
女のがりまかりたりけるに、「今夜は帰りね」と申しければ帰りにけるのち、「一夜はいかが思ひし」など申したりければいひつかはしける
秋風に吹き返されてくずの葉のいかにうらみし物とかはしる
（金葉集・恋上・三九二・藤原正家）
○をぎのは―一三五の作者を遇す。道命を恨む人。
近江のすけなかきがむすめども、かたちよく、こころたかしとききたまてつかはしける
をぎの葉のそよぐごとにぞうらみつる風にかへしてつらき心を
（元良親王集・一三二）
ひさしくおとづれで、さるはむつまじくなりにけり
風ふかぬうらみやすらむうしろめたのどかに思ふ荻のはのおと
（実方集・一二八）

○うらみつとだにいはずぞあらまし―一三五が詠まれなかっただろうとのこと。「いはずぞあらまし」は二九八参照。

たびたびかへりごとせぬ女に

見やしてし見ずやなりこしおぼつかなうらみつとだにこたへやはせぬ　（匡衡集・八）

さくらの花を見て

年ごとの名をだにかへば世の常の桜とのみはいはずぞあらまし　（信明集・一三六八）

【評】三〇七に重出。あなたの手紙は中身が色良い返事ではなくとも、音沙汰なしよりはましだとの思いから、それを誘い出したのは私（道命）の歌だ、と主張した。

137　人のもとに、女へしやるとて

きみゆゑにてをふるゝかなをみなへし心をくらすのべのしらつゆ

【校異】○女へし―女郎花（書1・谷）をみなへし（書2）、○心をくらす―こゝろをくらむ（谷）

【他文献】なし。

【現代語訳】人のもとに、女郎花を送るということで

あなたのために手を触れたことですよ、女郎花に。私に嫉妬して、私の心を悲しくさせる涙のような、野辺の白露だよ。

【語釈】

○てをふるゝかな―同様の表現はない。むしろ、花などに手を触れないとする否定表現を多く見いだせる。次の『拾遺集』歌が背景にある歌とみるべきか。とすれば、女郎花は白露の妻だから手を触れるべきではないが、ほかでもないあなたに送るため触れた、の意か。

白露の置くつまにする女郎花あなわづらはし人な手触れそ　（拾遺集・秋・一六〇・読み人知らず）

○をみなへし―相手が女性であることとともに、この歌が恋歌の装いであることを示す。

折りて見る袖さへ濡るる女郎花露けきものと今や知るらん　（後撰集・秋中・二八一・右大臣）

よそにのみ見つつは行かじ女郎花をらん袂は露に濡るとも　（後拾遺集・秋上・三一六・道済）

○心をくらす―『道命阿闍梨集本文と総索引』の総索引では「（心を）暗す」とする。「暗す」は「（悲しみなどで心を）暗くする。曇らす。例として、「…ただ知らぬ涙のみこそ心を暗すものなれ」〈源氏物語　須磨〉」（小学館古語大辞典）があり、和歌では、

いにしへを恋ふる涙にくらされておぼろに見ゆる秋の夜の月　（詞花集・雑下・三九二・公任）

がある。一三七では「野辺の白露」が道命の心を暗くする、または白露そのものが心を暗くする意となる。「拾遺集」歌と関係深いとすれば、女郎花を妻とする白露が恨んで作者の心を暗くするの意（A）とも、作者に女郎花を触れられた白露が悲しんで己が心を暗くするの意（B）ともなる。別に、「心おくらす（後らす）」の可能性もある。即ち、「女郎花は相手の許に届くが、自分の心は、野辺の白露がここにとどめてしまう」の意（C）とも解せる。

限りなき雲井のよそに別るとも人を心に後らさむやは　（古今集・離別・三六七・読み人知らず、遍昭集・一九）

これらの中で、『源氏物語』の用例に従いA説で解した。しかし、「す」の原表記である片仮名「ス」が「ム」の誤写という可能性もあり、それなら谷山本本文が正しく、

女郎花にほふあたりにむつるればあやなくつゆや心おくらん　（拾遺集・秋・一五九・能宣）

にほぼ同想の理解しやすい内容となる。この場合も露が作者を女郎花への恋敵とする点は変わらない。

○のべのしらつゆ―この道命歌以外は、永久四年歌合に一首あるほか、

中世まで例のない用語。

夕されば尾花おし並み吹く風に玉抜き乱る野辺の白露
（永久四年八月雲居寺結縁経後宴歌合・九・三宮相模）

女郎花たもとは萩の寝たる色ほかにな置きそ野辺の白露
（拾玉集・三一〇〇）

【評】「をくらす」の意味が明確にできず、試解にとどまる点で問題が残るが、『古今集』以来の女郎花の詠み方に沿い、遍昭の女郎花歌に通う諧謔性もある。

138 かはべにて、おもひをのぶといふ心を

かはべにてくらさざりせばゆくあきのふかさあさゝをいかでしらまし

【校異】○かはへにて—かはへに（谷）、○ふかさ—ふかゝ（書1）

【他文献】なし。

【現代語訳】川の辺で、思いを述べるという内容を

もし川の辺で暮らさなかったら、過ぎてゆく秋の情趣深さや物足りない浅さをどのようにして知っただろうか。

【語釈】

○かはべにて、おもひをのぶ—「おもひをのぶ」を題とする歌は多いが、同題は他例なし。一方、河辺を題として詠む和歌はあるが、特に季節などの限定はない。あるいは「かはべ」とは、道命の親しんだ嵐山麓の大井川（参照「かゞりびをともす河べ…」一二六）を指すか。

たびの思ひをのぶといふことを
（拾遺集・恋三・七八一・石上乙麿）

むすめにまかりおくれて又のとしの春、さくらの花ざかりに、家の花を見ていささかにおもひをのぶといふ題をよみ侍りける
（同・哀傷・一二七四・実頼）

河辺につるむれたる
（貫之集・三四九）

河辺納涼
（道済集・一四四）

右大弁のさそひ給ひしかば、梅津にまかりて、河辺水秋夕風
（頼実集・七三）

晩夏二首、かはべにあそぶ
（家経集・五〇）

○かはべにてくらさざりせば—河辺の暮らしを詠む和歌は僅少。「深さ浅さ」が「川」の縁語。

帰るべき道もとほきに蛙なく河辺に日をも暮らしつるかな
（長久二年弘徽殿女御歌合・一四・赤染衛門）

白河の同じ川辺の桜花いかなる宿を人たづぬらん
かへし

花の色の深さ浅さにおのづから宿分く人となりにけるかな
（公任集・三八、三九）

○ゆくあき—去る秋を惜しむ余情がある。中世以前の例は少ない表現。道命以前では、次の三首が見えるのみ。

篠薄ほに出でずとも行く秋を招くと言はばそよと答へよ
（古今六帖・三七一四・篠薄）

行く秋の風に乱るる苅萱は標結ふ露もとまらざりけり
（順集・一五三）

目に見えて行く秋なれや夜もすがらいも寝で何をまもるなるらん
（公任集・一三〇）

○ふかさあさゝ—『公任集』にある「花の色の…」の歌から類推すれば、紅葉の色合いの濃さ薄さとなるが、「ゆくあきの」とつながりから、「ふかさ」は暮秋に見いだすべき深い情趣、「あささ」は秋がそっけなく暮れるなど「ふかさ」に対立する興醒めなことと考えられ、現代語訳もそれに従った。しかし、次に掲げる赤人詠のように、季節の進み具合をいうとの解もあり得るが、やはり「ゆくあき」と晩秋に限定されていることからすれば合わないだろう。

ともかくも言ひ放たれよ池水の深さ浅さを誰か知るべき
（拾遺集・雑恋・一二三三・読み人知らず）

花をのみ訪ね来し間に春はまだ深さ浅さも知られざりけり
（赤人集・一六）

あるいは、「かはべ」が道命の親しんだ大井川だとすると、

おほゐの秋
水上にしぐれすらしもおほゐ河ちりくるもみぢいろふかくみゆ
（兼澄集・一一七）

大井河にて人人もみぢをよめる
大井河水のあさくも見ゆるかなもみぢの色は雨とふれども
（定頼集・一〇）

などでの「深さ」「浅さ」の反映も想像される。この場合だと、紅葉の色の濃さと、散った紅葉が多量なために見える川の水の少さということになるだろうが、一三八はやはり晩秋そのものへの感懐と考える。

【評】 河辺での暮らしが、晩秋の味わい深さや、人心を置いて進む截然とした季節の変化を知らせるとの認識を前提とした詠と捉える。大井川での詠とすれば、実体験を確かに踏まえたものと言えるだろう。

人〻〳〵あつまりて、ものへゆくに、餞すとて

139 思出もなきふるさとのおもひいでにけふをや人のいはんとすらん

【校異】 ○思出―おもひ□（谷）、○おもひいて―おもひて（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 人々が集まって、あるところに行く人に、餞別を送るということで

思い出すべきこともない故郷の思い出として、今日の賑わいを人は言おうとするのだろうか。

【語釈】

○人〻〳〵あつまりて…―「ものへゆく」の主語が「人〻〳〵」であるかのようで意が解しがたい。一三九は三〇九に重出するが、それは三〇八と一連で、三〇八の詞書は「人々あつまりて、さけなどのまするに、ものへゆくひとに」とある。つまり、人々が集い酒宴を催したが、その中の一人が旅立ち、その人に餞別の歌を送るとのこと。これによるべきだろう。

○思出もなきふるさと―長年過ごした土地を離れる悲しみに暮れて、楽しい思い出をたどることもできない心境を表す。

帥伊周つくしへまかりけるに、川尻はなれ侍りけるによみ侍りける
思ひ出もなきふるさとの山なれど隠れゆくはたあはれなりけり
（拾遺集・別・三五〇・嘉言、詞花集・雑下・三九一・正言）

○おもひいでにけふをや人のいはん―「けふ」を「思ひ出」とする例は、平安末までは稀。「人」は旅に出る人。

筑前になりて、二月ばかりに、殿上人花見に誘はれて、まかりて
桜花やまぢ残らずたづねつるけふを都のおもひでにせん
（経衡集・一三六）

思ひでもなくて過ぎぬる年なれどけふの暮るるは惜しまるるかな
（忠通集・一一一）

○いはんとすらん―道命以外にも、兼澄集・九四、嘉言集・一八四、和泉式部集・七〇七、為仲集・一一一などの例がある定形表現。

みる人はみななくなりぬ我を誰あはれとだにもいはむとすらん
（道命集・五八）

【評】 三〇九に重出。詞書「又」初句「おもひいでし」。ある知人が旅立つことがあり、道命を含めて親しんだ者たちが送別の宴を催した折に、旅立つ人の気持ちを推測して詠んだものと考える。

140　月をみて、ひさしくあはぬ人のもとに、年のはてに
としせめてきみがこひしくおぼゆるはあはぬ月日のつもるなるべし

【校異】○ひさしく―ひさしう（谷）、○人のもと―人許（谷）○おほゆる―なりゆく（谷）

【他文献】なし。

【現代語訳】月を眺めて、しばらく会っていない人のところに、年末に送った

年が押し詰まって、あなたが恋しく思えるのは、会っていない間の月や日が積もり重なるからなのだろう。

【語釈】

○月をみて―『道命集』では、他に一一、一二、一一四（三〇〇）でも同様の詞書があるが、空の月を見ての様々な感慨が古来多くの歌で詠まれている。一四〇では、年末でもあることに導かれて、天象の月から暦上の月による時の推移を連想した。

月を見て

おほかたは月をも愛でじこれぞこのつもれば人の老いとなるもの

（古今集・雑上・八七九、業平集・五五）

○年のはてに―年末に一年間を振り返っての感慨を示す。

年のはてによめる

昨日と言ひ今日と暮らして明日川流れて早き月日なりけり

（古今集・三四一・冬・列樹）

○としせめて―和歌では、他に例ない表現。「せめ」は「迫む・逼む」の連用形で、「押し詰まる。近づく。迫る。『かく年もせめつれば』〈源氏物語　若菜下〉」（小学館古語大辞典）。

○あはぬ月日―会えずに恋しく思う日々。恋歌的な表現。

七夕のあはぬ月日は多かれど暮れ待つほどを思ひやるかな

（重之女集・九八）

○つもるなるべし―「つもる」とされるものの多くは、「雪」と「年」。「月日」は希。ここでは恋しさが募ることを示す。

（うちの御ゑに）十二月つごもり、けさうするをとこ来て、

雪降れるにもの言へり

年暮れて降り積む雪は春なれやつもる月日をはかながるらん

（元輔集・一六〇）

いたづらにすぐす月日は年をへて我が身につもるものとしらなむ

（相模集・三七九）

【評】前歌に続けて三一〇に重出。詞書「久しう会はぬ人のもとに、年のはてに」第三句「おぼゆれば」。「月日」についての具象的な天象と観念的な暦を重ねてイメージすることは、業平歌以来の型に従っている。会わずにいる月日と相手への恋しさが同じように積み重なるという点に説得力がある。詞書に「月をみて」とあるが、三〇八の歌は、

かくばかりあはれさやけき月をみていかなるよにかみるべかるらん

とある。これと一連の三〇九は一三九の重出歌で、三〇八と三〇九は一連だから、三〇八も本来一三九の直前にもあったが脱落したのではないだろうか。そして一四〇も続けて重出しているから、ここまでは一連だと考えることもできる。その場合三〇八で月夜の酒宴の後に旅立った人へ惜別の歌を贈ったが、一四〇はその別れた人に時を経て送った歌との解もあり得る。あるいは、本来は別の歌だが、三〇八歌との表現に共通することから配置されたとも考え得る。以下に、この箇所について重出を棒線で示して図示する。

一三九詞書――――――三〇八詞書
三〇八和歌（…月をみて…）
三〇九詞書（又）
一三九和歌――――――三〇九和歌
一四〇詞書（月をみて…）―三一〇詞書

一四〇和歌――――――――三一〇和歌

おとにはきゝて、まだみぬ人をみて

141 みぬほどはいぶかしかりきみてのちはものいはまくのほしき君かな

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 評判は聞いていて、まだ会ってない人に会って会わないうちは気がかりに思っていました。会った後は直接言葉をかけたいあなたですよ。

【語釈】

○おとにはきゝて、まだみぬ人―噂を聞いていてまだ会ったことがない人、または手紙のやりとりはしていてまだ会ったことがない人、の両意を想定出来るが、次の例から前者と推測する。

音に聞き目にはいまだみぬ吉野川六田の淀を今日見つるかも

（万葉集・巻七・一一〇九）

伊予にくだるに、よしあるうかれめに

音に聞き目にはまだ見ぬ播磨なるひびきの灘ときくはまことか

（忠見集・一四八）

○いぶかしかりき―万葉集には多く（八例）、勅撰集には見えない語。はっきりしないことを明らかにしたい気持ちを言うが、会う前の会う事への期待を表す。

あひ見まく欲しきがためは君よりも我ぞ勝りていふかしみする

（万葉集・巻十二・三一二〇）

をとめごが玉匣なる玉櫛のいぶかし今も妹に会はざれば

（古今六帖・第五・三一七九・くし）

水鳥の鴨の住む池の下氷なくいぶかしき妹を今日見つるかな

（古今六帖・第三・一六二二・ひ）

○みてのちは―会う前より相手への思いが強まる。

あひ見ては恋ひ慰むと人は言へど見て後にぞも恋ひまさりける

（万葉集・巻十一・二五七二）

○ものいはまくのほしき君かな―同様の表現なし。「見まくのほしき君かも」は万葉集に四例（五八三、一〇一九、二五五九、三〇〇五）ある。古風な表現か。内容は「会増恋」。

老いぬれば避らぬ別れもありと言へばいよいよ見まくほしき君かな

（古今集・雑上・九〇〇・業平母）

雪を薄み垣根に積める唐薺なづさはまくのほしき君かな

（拾遺集・雑春・一〇二一・長能）

【評】 発想、用語ともに古風な恋歌めき、「みぬほどは」「みてのちは」など、きわめて素直な素人的な歌。

侍所にて、人のものしたまひて、又のつとめてかへり給に、かはぎりのたつをみて

142 かくてこそあらまほしけれいづちとてたちわかるらんけさのあさぎり

【校異】 ○侍所にて―はへる所に（谷）、○ものしたまひて―物見たまて（谷）、○かへり給に―かへり□□（書1）、○いつちとて―いつとても（谷）、○あさきり―河きり（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 私がおりました所で、人がお出で下さって、翌朝帰られた時に、川霧が立つのを見て

まことにここに立っていてほしい物です。どこに向かって立ち離れていくのでしょうか、今朝の朝霧は。そしてあなたは。

【語釈】
○侍所にて―道命集の中では「法輪寺に侍りけるころ」「山寺に侍りしころ」「侍る山寺に」などあり、ここもそうした寺にいたころのこととするか。
○かくてこそあらまほしけれ―詞書からの文脈では、川霧が立つように、その人にここに立っていてほしいの意。ここでは、そのまま作者のもとにいて欲しいという気持ちを表す。

かくてこそ見まくほしけれ万代をかけて匂へる藤波の花
（新古今集・春下・一六三・延喜御製）

三月のつごもりほととぎすをききて
またでこそあらまほしけれ時鳥おもひもかけぬこころそらなる
（道命集・二四七）

○いづちとて―離れていく先を問う。

いづちとて急ぐなるらんいどこにも今宵は同じ月をこそ見め
（和泉式部集続集・五三五）

○たちわかるらん―立ち去って行く相手のことを前提に、同様の霧の様子を言う。

天暦の帝かくれさせおはしまして、七月七日御忌はててちりぢりにまかり出でけるに、女房の中に送り侍りける
今日よりは天の川霧たちわかれいかなる空に会はんとすらん
（詞花集・雑下・三九九・元輔）

秋霧はたちわかるとも逢坂の関のほかとて人を忘るな
（範永集・九五）

○けさのあさぎり―秋の早朝、濃く周辺を包み覆うとされる。

我が宿のけさの朝霧見渡せばさほの川辺に立ち渡りけり
（安法法師集・三）

常よりも程経て過ぐる秋なれどなほ立ちとまれけさの朝霧
（公任集・一三四）

【評】 上句の意図が不明瞭。霧が立ち別れるように、相手に別れ去ってほしいとの意とも考え得る。

143 いもうとのうせ給へるいみしの程、つれ〴〵なるに
はかなさはよのつねとてもなぐさめつこひしきをこそしのびわびぬれ

【校異】 ○つれくなるに―つれ〴〵なるを（書2）、○いみし―いみ（谷）
【他文献】 続古今集・哀傷・一四三七 詞書「いもうとのみまかりにける忌みのほど、つれづれとながめて詠める」
【現代語訳】 妹が亡くなった喪中の時、所在なさに人の命のあっけなさは、この世の定めとしても慰めた。しかし、妹が恋しくてならない思いを堪えるのは辛いことだよ。
【語釈】
○いもうと―道命の姉妹。つまり藤原道綱の女で尊卑分脈に見えるのは、「紫式部日記」に「宰相君」と見える大江清通妻となった豊子のみだが、彼女は道命の没に後れ長元九年（一〇三六）に出家しているので当たらない。別に「右大将殿姫君著裳」（『権記』長保三年・一〇〇一・三月二十三日条）、「此暁更傅殿姫君亡去」（『権記』寛弘七年・一〇一〇・正月二十六日条）ともあり、他の女子の存在が知られる（上村悦子「傅大納言藤原道綱の妻妾・子女考」日本女子大学紀要17）。三保サト子氏は、寛弘七年に亡くなった姫君を「いもうと」とする（「道命阿闍梨伝考――晩年の軌跡――」『論考平安王朝の文学――一条朝の前と後――』新典社 平成一〇・一一）。
○いみし―谷山本本文「いみ」が正しいか。
○はかなさはよのつね―無常こそこの世の不変の真実とする。

年いたく老いたるおほぢのものしたる、とぶらひに

残りなき木の葉を見つつ慰めよ常ならぬこそ世の常のこと
（大弐三位集・三四）

○しのびわびぬれ―表さず隠しているのが辛い。

隠れ沼にしのびわびぬる我身かな井出の蛙となりやしなまし
（後撰集・恋二・六〇六・忠房）

【評】上句は出家者として当然な世の無常の一つの現れとして妹の死への覚悟を示すが、下句は亡き妹を恋うる押え切れない生身の人間的感情である悲しさと辛さを表している。

日ごろすぎて、ゑなどわらひがちなるにつけても、あはれなれば

144 なくなみだいかでとゞめんと思しをとまるもまたぞかなしかりける

【校異】○思しを―おもひしに（谷）

【他文献】なし。

【現代語訳】（姉）妹の死から日数が経ち、日常に戻って笑顔がちになるにつけても、しみじみ悲しいので、泣いて出る涙を何とか止めようと思ったが、涙が出ないのも、この世に留まるのも、またとても悲しいことだよ。

【語釈】

○日ごろすぎて―一四三に続き、（姉）妹の死から何日か経過して。

○ゑなどわらひがち―「ゑ」は、「笑顔」のように複合語として用いられるのが一般的で、単語として用いられる例は他に見当たらない。「ゑがち」は「源氏物語」や「枕草子」に例がある。

○なくなみだ―泣く声に競って出る涙。次の篁詠は妹の死は共通、涙への意識は逆。

妹のみまかりにける時よみける

泣く涙雨と降らなむ渡り川水まさりなば帰りくるがに
（古今集・哀傷・八二九・篁）

○いかでとゞめん―涙は止めたくても止められないと歌うものが多い。

いとどしくとどめがたきはひたみちの惜しまれぬ身の涙なりけり
（和泉式部続集・四〇四）

惜しむとも難しや別れ心なる涙をだにもえやはとどむる
（拾遺集・別・三二一・御乳母少納言）

限りありて人はかたがた別るとも涙をだにもとどめてしがな
（千載集・哀傷・五七八・崇徳院）

○とまる―和歌での用例で見ると、①涙が止まる、②旅人を見送る、③命が留まる、などあるが、ここは詞書の「ゑなどわらひがち」及び、第二句との対応もあり、①に③を掛けると解する。

ぬきみだる涙の玉もとまるやと玉の緒ばかりあはむといはなん
（拾遺集・恋一・六四七・読み人知らず）

きえぬべき露の我が身もことのはにかかればとまるほどぞ悲しき
（元真集・一二四）

○またぞかなしかりける―「また」とあるのは、涙が「流れること」も悲しいが「止まること」も悲しいので、結局どちらも同じ「悲し」であることを導いている。

先立たむことを憂しとぞ思ひしに後れてもまた悲しかりけり
（千載集・哀傷・五九八・静縁法師）

【評】一首の表現は平明。（姉）妹の死から何日も立つうち自然涙も止まり、日常の中に笑みも戻ったが、それによって亡き妹との距離の大きさと生きる身の辛さが認識され、新たな悲しみが生じた。

これはは（う）やうの、さうぐ〜しければかくなめり、あるじうせ給へる所の花さきたるをみて

145 あだなりとなげきし人のよをみれば花のうへとぞいふべかりける

【校異】○さうぐしければ―さうぐしけれ（谷）、○あたなりと―あたなりし（谷）

【他文献】なし。

【現代語訳】この歌は、若い頃で、寂しかったのでこのように詠んだようだ。主人がお亡くなりになった所の花が咲いたのを見て

花の咲くことがあっけないと嘆いた人のはかない一生を見ると、それは花についてのことだと言うべきことだよ。

【語釈】

○これははやうの―一六五にも「これははやうよみたりし」とある。前後の歌と区別するために付した歌集編纂時の断り書き。他の私家集にも似た例が見られる。

これは、ゐでといふ御厠人に山吹の花を持たせて・・・（兼輔集・二〇左注）

これは后の御歌にて（伊勢集・五七詞書）

これは中務が集にも入れり（同・四五九左注）

これは一条殿の（高光集・二六詞書）

右によれば、詞書冒頭の場合と左注と両用あり、ここも「これ」が一四五詞書なのか、一四四左注なのか不明瞭。一応底本の記載に従って一四五詞書とする。

○あだなりとなげきし人―「人」は「あるじ」。その人が、生前前栽の花がはかないと嘆いていた。「あだ」は桜花について言うことも多い。

あだなりと名にこそ立てれ桜花年にまれなる人も待ちけり（古今集・春上・六二・読み人知らず）

世のなかのいとはかなう聞ゆるころ

あだなりと嘆かれなくに山桜世のはかなさをいかに聞くらん（道命集・一〇四）

（はらから知りたる人のもとにて、桜を見て）

思ひきや世ははかなしと言ひながら君が形見に花を見むとは（同・二二〇）

○人のよ―人の命・人の一生。ここでは亡くなった主の命。人の命を、花のはかなさに譬えたり比べて、より短いと詠むことは多い。

聞くにだに露けかるらん人の世を目に見し袖を思ひやらなん（後撰集・哀傷・一四一〇・清正）

今はとて風待つほどの桜花人の世よりは久しかりけり（兼輔集・一〇二）

花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきに恋ひむとか見し（古今集・哀傷・八五〇・望行）

あだなりし人の心に比ぶれば花もときはのものとこそ見れ（金葉集・恋上・四一一・忠通）

○花のうへとぞいふべかりける―「花の上」とは「花についてのこと」の意。花のはかなさを嘆いていた人が亡くなり、そのはかなさが人の命ではなく、花についてのことだったら良かったとの思い。

咲けば散る咲かねば恋し山桜思ひ絶えせぬ花の上かな（拾遺集・春・三六・中務）

もろともに立ちも出でねば春霞花の上こそ聞かまほしけれ（下野集・二）

【評】亡くなった主なる人物が、生前花のはかなさを嘆くことがあって、今彼の邸で咲く花を見た作者が、実際は花より人の命こそはかなかったということを確認して、人より花の方がはかなかったら良かったと、亡き人を惜しんだ。花より人こそはかないとすることは『古今集』以来『道命集』を含めて多くの和歌に詠まれている。

山寺に侍しに、なをたかが(ゝ)もとより、四月つごもりがたに、かくいひたりし

146 こゝにわがきかまくほしきあしひきの山ほとゝぎすいかになくらん

【校異】○なをたかゝ―なをたゝか（書2・谷）、○わかきかまく―わかやきかまく（谷）、○山ほとゝきす―山ほとゝす（谷）

【他文献】後拾遺集・夏・一八一・藤原尚忠　詞書「道命法師山寺に侍りけるにつかはしける」第二句「聞かまほしきを」

【現代語訳】山寺におりましたところ、尚忠のところから、四月末頃に、このように言ってきた

ここ都で私が聞きたい山時鳥は、山ではどのように鳴いているのでしょうか。

【語釈】

○なをたか―底本本文誤り。書陵部本（書2）及び谷山本で訂正。藤原尚忠。生没年未詳。父は加賀介従五位下吉信。『権記』に拠ると長保六年（一〇〇四）正月五日、東宮（三条院）少進、従五位下。越後介。正暦年間に開かれた「花山法皇東院歌合」に参加。道命は花山院と同様に、三条院にも私淑していたとされる（「道命阿闍梨の伝記的考察」田中新一氏『國語國文學報』第四十二集）。道命と尚忠の接触はそうしたことに拠るか。なお藤本一恵氏は、この歌が「麗花集」にあるとするが（『後拾遺和歌集全釈』上）、久曽神昇氏の「麗花集（翻刻）」（『久曽神昇博士還暦記念研究　資料集』愛知大学国文学会編　風間書房　昭和四十八年刊）には、「某家蔵香紙切」の一葉で清原元　輔の歌一首に続けて詞書と作者名を「山ざとのかきねの花にうぐひすのなくをきゝて春宮にたてまつる　なほたゞ」（『新編国歌大観』「麗花集」で三七に続く）とするのみである。尚忠が三条院の東宮時代に送った歌が続く筈と思われるが、この一四六とは別の歌だろう。

○四月つごもりがた―時鳥の声は五月に聞ける物だが、もっと早く聞きたいとする。

五月来ば鳴きもふりなむ時鳥まだしきほどの声を聞かばや
（古今集・夏・一三八・伊勢）

いつの間に五月来ぬらむあしひきの山時鳥今ぞ鳴くなる
（同・同・一四〇・読み人知らず）

○こゝに―尚忠のいる都。

一人ゐて物思ふ我を時鳥ここにしも鳴く心あるらし
（後撰集・夏・一七七・読み人知らず）

○きかまくほしき―時鳥の声を待ち望む。

めづらしき玉の台の花陰に聞かまくほしき鶯の声
（公任集・二〇）

何事もきかまくほしきおく山に人だのめなる時鳥かな
（道命集・二〇九）

【評】作者は都にいて、五月には山から麓の里に飛来して鳴く時鳥の声を待ちかねて、四月末に山寺に住む道命に聞いてきた。

返事

147 あしひきの山時鳥のみならずおほよそどりのこゑもきこえず

【校異】○返事―返し（書2）□□（谷）、○おほよそ―おほより（谷）

【他文献】後拾遺集・夏・一八二　詞書「かへし」、第四句「おほかたとりの」、後六六撰。

【現代語訳】返事

（私のいる山寺では）山時鳥だけでなく、カラスの声も聞こえません。

【語釈】

○のみならず―平安和歌では他に次掲の一例あるのみの珍しい表現。

藤本氏は『後拾遺和歌集全釈』で漢語調とする。

五月雨は淀の沢水のみならず生ふる真薦も深く成り行く

（林葉集・二七二）

○おほよそどり―後掲の『和歌童蒙抄』歌について、本文に「凡（オホヨソ）どりは鳥の一名なり」とあって、カラスの異名とされる。「おほよそ」については、『万葉集』の「おほろかに我し思はば下に着て馴れにしきぬを取りて着めやも」（巻七・一三一六）の初句原表記が「凡尓」とあり、西本願寺訓は「おほよそに」なので、「いい加減。通り一遍」（日本国語大辞典）を表す「おほろか」に通じると思われる。世間一般の人の意で「おほよそ人」の用例はある。

鳥てふおほよそどりのこころもてうつし人とはなに思ひけむ

（和歌童蒙抄・七九二）

あはれなきおほよそどりの心すら月夜となればざれありくなり

（夫木和歌抄・雑一七・一六七〇九）

君が名の立つにとがなき身なりせばおほよそ人になして見ましや

（後撰集・恋四・八八〇・忠房）

○こゑもきこえず―単に山というより、なお奥深い所を表す。

時鳥声も聞こえず山彦はほかに鳴く音を答へやはせぬ

（古今集・夏・一六一・躬恒）

飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ

（同・恋一・五三五・読み人知らず）

【評】 尚忠の、時鳥の声が時期前に聞ける山寺を羨むことに対し、時鳥はもちろん、カラスさえ鳴かない荒涼とした殺風景な所だと返した。

はらからのうせたるころ、又はらからにおくれておなじ思なる人に

148 いふかひもなきよの中のはかなさはきみばかりこそ思しるらめ

【校異】 ○らめ―覧（書2）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 兄弟（姉妹）が死んだ頃、また、兄弟（姉妹）に死なれて私と同じ心境でいる人に

言っても甲斐のない世の中のあっけなさは、あなただけこそ思い知っているでしょう。

【語釈】

○はらからのうせたるころ、又はらからに……―道命の兄弟姉妹（A）が亡くなったのと同じころ、やはり兄弟姉妹（B）を亡くした知人（C）に送った、の意。「思ひ」は喪中の意があるが、ここは「同じ思」とあるので、「はらから」の死を悲しむ思い、の意か。『道命集』には、似た詞書で、

うせにける人のはらからの、いみじうさかへののしるに、かのうせにし人の乳母がりやりし　（二一一）

はらから知りたる人のもとにて、桜を見て　（二一九・二二〇）

はらからうせたりし人の御もとに、五月ついたちころ　（二二六）

がある。二一一の「うせにける人」はBとも考え得るが、「いみじうさかへののしる」という「はらから」と作者は親しんでいないので、全く別人の可能性が大きいか。二一九の「はらから」は、歌詞「のこれるえだ」及び、一連の二二〇の歌詞「きみがかたみ」から亡き人と思われ、哀傷歌であるからAに同じか。二二六は、「五月ついたちころ」が一四七と時期的に重なるので、一四八の詠まれた季節等が不明だが、Bをなくした C に送ったものとして、一四八とほぼ同時詠と見て良いかもしれない。又、Aは一四三の「いもうと」か。『道命集』には花山院をはじめ哀傷歌が多い。

○いふかひもなきよの中のはかなさ―ここでの「よの中」は人の命。人の命の短さは、不満を口に出しても何の効果もないこと。やり場のない悔しさ悲しさに基づく表現。

服なりけるころ、問はずと恨みて山吹をおこせたる人に

言ふ甲斐もなき世の中に生ひしより口なしに咲く花さへぞ憂き
（清正集・五七）

筑紫よりまかりのぼりけるに亡くなりにける人を思ひ出でて詠み侍りける

恋しさに寝る夜なけれど世の中のはかなき時は夢とこそ見れ
（後拾遺集・哀傷・五七七・高遠）

世の中のはかなきことも語らはむ物の哀れは知るらんや君
（長能集・二〇五）

世の中のいとはかなう聞ゆるころ

あだなりと嘆かれなくに山桜世のはかなさをいかに聞くらん
（道命集・一〇四）

○きみばかりこそ思しるらめ―私の気持ちがわかるのはあなたのみ、とする。

尋ねつる雪の朝の放れ駒君ばかりこそ跡を知るらめ
（後拾遺集・雑三・九八九・源兼俊が母）

ある人の、子失ひたるにやる

はかなさはすべてこの世のことなれど君いかばかり思ひ知るらん
（道命集・二六〇）

【評】「はらから」の死への抑えられない悲しみを共感できるのは、同じ境遇の人物のみだとする。その人に訴えることで癒やしを求めた。

障子の絵に、みかどの、おまへにむしどもの草かげにあれたるをなげき給へる所

149 ふるさとはあさぢがはらとあれはてて（欠）よすがらむしのねをのみぞなく

【校異】○障子―さうし（谷）、○むしどもの―むしとも（谷）、○草かけ―くさかち（谷）、○給へる所―給て（書2）たまへる所に（谷）、○あれはて□―あれはてゝ（書1・書2・谷）

【他文献】後拾遺集・秋上・二七〇　詞書「長恨歌の絵に、玄宗もとの所に帰りて虫ども鳴き、草も枯れ渡りて、帝嘆き給へるかたある所を詠める」、後六六撰。

【現代語訳】障子の絵に、皇帝が、御所に虫が草陰で（鳴く）荒涼とした情景を嘆かれている所

馴染んでいた宮殿は浅茅の原となって乱雑に茂り尽くし、夜中虫が鳴き続け、そのように我も声をあげて泣くばかりだ。

【語釈】

○障子の絵―長恨歌は元和元年（八〇六）に成立したが、日本では弘仁九年（八一八）成立の『文華秀麗集』に所収される巨勢識人の詩が最も早い摂取とされる。長恨歌を題とした和歌は、道命集のほかに伊勢集・高遠集・道済集に見える。但し、道命には「長恨歌和歌以外に白詩取りは認められず」、白詩取りについて「公任、実方、長能、道命ら花山院周辺にはその関心は薄」いとされる（「摂関期和歌と白居易」近藤みゆき氏『白居易研究講座』第四巻　勉誠社平成五年十月刊）。

西宮南門多秋草

九重の玉の台も荒れにけり心と敷ける草の上の露

宮葉満階紅不掃

落ち積もる木の葉木の葉はおのづから嵐の風にまかせてぞ見る

夕殿蛍飛思悄然

思ひあまり恋しき君が魂とかける蛍をよそへてぞ見る
（高遠集・二八四～二八六）

不見玉顔

思ひかね別れし人を来てみれば浅茅が原に秋風ぞ吹く

池苑依旧

草も木も昔ながらの宿なれど変はらぬものは秋の白露
（道済集・二四五、二四六）

○みかどのおまへに……なげき給へる所―「長恨歌」の中で楊貴妃の死の後、玄宗皇帝が宮殿に帰る場面の「東望都門信馬帰　帰来地苑皆依旧…西宮南内多秋草　落葉満階紅不掃…夕殿蛍飛思悄然」に当る。

○ふるさと―「自分が過去にかかわりを持った所」（『歌枕歌ことば辞典』）。「長恨歌」の「西宮南内」で、玄宗皇帝の宮殿。

○あさぢがはら―荒涼としたイメージがある。「長恨歌」の「多秋草落葉満階紅不掃」が相当する。

浅茅生の秋の夕暮なく虫は我がごと下に物や悲しき
（後拾遺集・秋上・二七一・兼盛）

我が宿は浅茅が原に荒れたれど虫の音聞くぞ取り所なる
（嘉言集・八〇）

○よすがら―一晩中。道命以前の和歌に例見えず。

東路や鳴海の野辺に旅寝して夜すがら聞きつ鈴虫の声
（重家集・二八二）

○むしのねをのみぞなく―「虫の」までが有心の序。「音をのみぞなく」は類例多い表現。「長恨歌」の「夕殿蛍飛思悄然」に相当。

憂かりしに秋は尽きぬと思ひしを今年も虫の音こそなかるれ
（金葉集・雑下・六〇八・康資王母）

【評】三一一に重出。詞書「長恨歌の、帝のもとの所に帰り給て虫どもの鳴き、草陰に荒れたるを御覧じて泣き給ふ所に」。楊貴妃との悲恋の果ての玄宗皇帝の心境を詠んだ屏風歌。「虫が作者の創意か。乱後の玄宗の嘆きが、寂寥たる浅茅原の風景に重ねられている」（川村晃生氏『後拾遺和歌集』）。

150　春潤月あるとし、あめのおとのどけしといふ心をよみしに

ゆくはるのあまりありとかきくなへにあめのあしおとのどかなるかな

【校異】○のとけし―いとけし（谷）

【他文献】なし。

【現代語訳】春閏月がある年、雨音がのどかだという趣旨を詠んだが過ぎゆく春が余りがあるとか聞くとともに、雨の足音がのんびりすることだよ。

【語釈】

○春潤月あるとし―道命の生きた天延二年（九七四）から寛仁四年（一〇二〇）までで、閏二月があるのは、正暦二年（九九一）と寛弘七年（一〇一〇）のみ。閏三月があるのは、天元三年（九八〇）と長保元年（九九九）のみ（『日本暦日便覧』参照）。和歌初句に「ゆく春」とあるので閏三月とすれば、この歌は道命二十六歳の長保元年（九九九）閏三月の作。

○あめのおとのどけし―同題は他に例見えず。雨音を詠むのは八代集では、

つれづれと音絶えせぬは五月雨の軒の菖蒲の雫なりけり
（後拾遺集　夏・二〇八・俊綱）

が最初。「のどけし」は八代集の歌中で二十余例見られるが、多くは春、または春の花について言う。春雨は、閏月のため春が通常より長くなったため「のどけし」の実感が強まる。

桜花のどけき春の雨にこそ深きにほひもあらはれにけれ
（高光集・一〇）

閏三月侍りけるつごもりに

常よりものどけかりつる春なれど今日の暮るるは飽かずぞありける
（拾遺集・春・七八・躬恒）

○ゆくはる―過ぎ去る春をいう例多い表現。擬人法。

○あまりあり―閏月がある。

やよひに閏月ある年、司召しの頃、申文にそへて左大臣の家に遣はしける

あまりさへありて行くべき年だにも春に必ず会ふよしもがな
（後撰集・春下・一三五・貫之）

○きくなへに―「聞くとともに」、「聞くと同時に」の意。

小松原けふは子日と聞くなへに野辺の霞ぞ今朝はたなびく
（高遠集・三二八）

○あめのあしおと―「雨音」の題に応じた。「雨音」を直接詠む例は見いだしがたく、ここも雨の音を人の足音に例えた表現となっている。

蓬生の荒れたる宿のとぼそよりいとど降り入る雨の足音
（千穎集・八五）

暇もなく漏りくる雨の足の音を我が遠妻と思はましかば
（散木奇歌集・一二一一）

【評】 通常なら終わる春が、なお一月あって春が延びる。それにつれ雨ものんびりできるようだ、との平明な歌。作者のゆったりした思いも伝わる。